

1. 私の初夢

年が明けて何がおめでたいかと言えば、それは自民党政権において「新しい資本主義」が模索され、元旦の日経新聞は「資本主義 創り直す」と書くように、資本主義の限界があからさまになったことであろうか。「ポスト新自由主義の資本主義はあるのか?」、それとも「資本主義のオルタナティブは可能か?」ということになるわけだが、それがあるとして果たしてポスト新自由主義の資本主義はいかなるものになるのかを問えば、新自由主義の徹底による労働力の商品化を100%やりきった資本主義が迎えるのは、地球規模の資本主義の破産と最後の世界大戦の勃発であろうか。いわばハルマゲドンであるわけだが、これまでの資本主義が恐慌を通じて蘇生するように、ポスト新自由主義はAIでロボットを産業予備軍化させ、資本が地球外も含めて新たな市場を開発出来るかと言えば、消費する労働者を消滅させた世界は、千年王国の到来というよりは、地球規模の専制型世界政府によるデストピアになるというのが、2022年の私の悪夢的初夢であった。

2. 新自由主義と宇野理論

資本主義の運命はすでにきわまったとする論考は、半世紀前に出版された大内力『現代資本主義の運命』（東大出版会 1972）で語られ、その続編となる大内力『現代社会主義の可能性』（東大出版会 1975）では、大内力さんが冒頭「もし資本主義のもっとも基本的な規定が労働力の商品化にあるとするならば、その否定としての社会主義は労働力の商品化の否定でなければならない」と語り、宇野系の学者（日高、馬場、矢吹、中山、高橋、田中）たちによって、エンゲルスにおける所有論的な、初期マルクスにおける否定の否定な社会主義理解への疑問や、「ザスーリチ宛ての手紙」や『ゴータ綱領批判』における協同組合やパルクミュンへのマルクスの着目が語られている。この流れは、当時の日本社会党におけるソ連社会主義をベースにした「日本における社会主義への道」の見直しにつながって、1980年代に入ると、フランスにおける自主管理を標榜したミッテラン政権の成立やユーロソシアリズムの影響もあって、80年代半ばに「ニュー社会党宣言」にまとまった。しかし、その後の歴史経過はソ連型社会主義の廃止であり、社会党の実質的解党であり、天敵をなくした資本主義は、グローバル化と新自由主義によって延命しつづけて、地球の底さえ抜こうとしており、今回羅須ゼミが「オルタナティブ」をテーマにするのも、私が「資本主義のオルタナティブは可能か?」を語ろうとするのも同根であろう。昨年末の末永さんのメールには、「宇野理論は（政治的）実践活動? にはほとんど役に立たないという感触の方に傾いてしまいますね。少なくとも私自身は」とあったわけだが、今日の話結論から言ってしまうと、悪夢の初夢に対する私の処方箋は、宇野理論によって「資本主義のオルタナティブ」を構想し、「労働力商品の止揚」の在り様を実践的に模索し、それを現実の「脱労働力商品（アソシエーションニスト）的働き方」や「アソシエーションやコミュニティの形成」へとつなげていくことであり、宇野理論はそのための最高の学問であるということである。

3. 甦るマルクス—福留久大氏の「人新世時代の社会主義」論

「宇野理論は（政治的）実践活動? にはほとんど役に立たない」というのは、宇野理論は学問であってイデオロギーではないからである。イデオロギー的なマルクス主義によれば、革命運

動とは唯物史観のイデオロギーで革命政党によるプロレタリア独裁をめざして階級闘争を行うことであり、新左翼的にはそれに世界資本主義論から世界同時革命論と過渡期世界論を付け加えたイデオロギーであったわけで、これらはソ連崩壊後はほぼ力をなくした。そしてそれと入れ替わりに全世界を新自由主義が跋扈する中で、再び見直されようとしえているのは『資本論』であり、「甦るマルクス」であろうか。「甦るマルクス」については近年斎藤幸平氏の『人新世の「資本論」』が評判になっているが、現在刊中の大内先生の「晩期3部作」もそうであり、その両著について、福留久大氏が昨年、社民党系の『進歩と改革』に「人新世時代の社会主義」を連載され、そこに仙台・羅須地人協会を以下のように紹介しているので、そこから見ていきたい。

「人新世時代を生き抜く知恵を求めて各地で模索が続その一つに仙台・羅須他人協会がある。羅須他人協会は、1926年、宮澤賢治が花巻に開いた地域農民との共同研讃の組織。その精神の継受とともに、マルクス・モリスの社会主義の要素を摂取して2013年に仙台に設立されたのが、仙台・羅須他人協会。発案し中心を担うのは、大内秀明・東北大学名誉教授。宇野弘蔵の直弟子として『資本論』の学説史的解明を軸とする学術活動とともに中央・地域の各種社会活動、で著名である。半田正樹（東北学院大学）・田中史郎（宮城学院女子大学）の二人の経済学者をはじめ尊敬する師への支援に尽力する老若男女の集いが形成され、『資本論』読書会、地域問題討論集会、出版活動が継続的に行われる」（『進歩と改革』2021年5月号）。

「モリス研究を進める大内秀明は、『資本論』の理解、特に「否定の否定」の論理の解釈に感嘆して、モリスを高く評価するに至る。また宮澤賢治の「芸術をもて、あの灰色の労働を燃せ」という標語がモリスの芸術論に由来することを知って、「賢治ファン」の仲間入りともなった。2003年には、仙台郊外・作並の地に森のミュージアム「賢治とモリスの館」が開設された。2013年に、仙台・羅須地人協会が設立された。『賢治とモリスの環境芸術』（時潮社2007）、『ウィリアム・モリスのマルクス主義』（平凡社新書2012）、『土着社会主義の水脈を求めて一労農派と宇野弘蔵』（平山昇との共著、社会評論社2014）、ウィリアム・モリス、E.B.バックス・共著『社会主義、その成長と帰結』（晶文社2014）、『日本におけるコミュニタリアニズムと宇野理論』（社会評論社2020）と、関連著作の刊行も続いている（※別紙「資料」参照）。特筆すべきは、志を共にする人々によって、将来社会の展望を内包した形で、東北の地を舞台とした具体的な地域循環型社会の構想が練り上げられていることである。大内秀明ほか共編著『自然エネルギーのソーシャルデザイン』（鹿島出版会2018）では、仙台都市圏における広瀬川水系を中心とする地産地消型エネルギー構想が論じられる。篠原広典・半田正樹・編著『原発のない女川へー地域循環型の町づくり』（社会評論社2019）では、女川に焦点をあてながら、いずれの原発立地自治体でも適用可能な「原発に頼らない地域循環型」社会構想が打ち出されている」（同6月号）。

福留久大さんは大内秀明『日本におけるコミュニタリアニズムと宇野理論』（社会評論社2020）に着目して、以下のように書く。

「そこでは、恩師・宇野弘蔵に即した『資本論』理解が提示されるだけに留まらず、宇野に欠けた論点を挙げてその補完に努める意志の表明が行われている。…「所有論アプローチ」について、こう述べられている。「自己の私的労働に基づく私的・個人的所有、その否定である社会的労働に基づく私的・ブルジョア的所有、さらにその否定である社会的労働に基づく社会的・公共的所有の『所有法則の転変』を、宇野『原理論』は厳しく批判したのである。こうした批判は、後期マルクスの『資本論』そのものにも向けられ、『科学的社会主義』の基礎づけとなっ

た。宇野理論の真髓は、単なる価値形態や労働力の商品化の強調だけではない。唯物史観のイデオロギーに他ならぬ『所有法則の転変』の全面的否定だった」（153-4頁）。大内には宇野に対する望蜀の念も残る気配である。「宇野は唯物史観の残滓とも言える『所有法則の転変』を否定し、いわゆる『窮乏化法則』などのドグマを排除したが、モリスなどに積極的に関説しなかったことにもよるだろうが、『共同体』の位置づけなど、コミュニタリアニズムについて積極的に踏み込んではいない。価値形態論を強調し、労働力の商品化の矛盾を資本主義経済の『基本矛盾』として設定したうえで、社会主義の目標についても、宇野は『労働力商品化の止揚』を強調した。しかし、それがコミュニタリアニズムに結びつく点には一切触れることなく、超然と『南無阿弥陀仏』としていたのであり、そうしたイデオロギー的禁欲を続けたままだった」（154-5頁）。このような望蜀の念を越えて、宇野に対する学問的批判の一端も垣間見ることができる。「宇野による『資本論』冒頭の労働価値説批判は、スミスの労働＝『本源的購買貨幣』の批判であり、商品経済的富を『労働生産物』に還元、非労働生産物の労働力だけでなく、土地・自然をも排除されていた。宇野の冒頭商品論は、『労働生産物』ではないが、『資本の生産物』に限定し、一方で価値形態論を重視しながら、スミスや『資本論』とともに、労働力や土地・自然を除外している。そのため『貨幣の資本への転化』『地代論』に難点が生ずるだけでなく、土地・自然に結びつく『共同体』の位置づけ、さらには『人間と自然の物質代謝』との関連も、不明確になっているように思われる」。そう述べた後で、「別稿を準備したい」と明記されたところが注目点である」（154-）。（同8月号）

この「別稿」については、間もなく『甦るマルクス—「晩期マルクス」からコミュニタリアニズムへ』（社会評論社）として発行される予定。上記のほかに福留久大氏は、「直球勝負の趣で骨太に〈労働力商品の止揚〉に基づく社会主義論を展開するのは、鎌倉孝夫氏である」として、鎌倉孝夫氏が『進歩と改革』2015年9月号に書いた『『資本論』の社会主義論』を解説して、「……こうして先の章句を巡るマルクスの真意が次のように解明される。〈マルクスが強調したのは、私有一労働者による私有の問題ではなく、結合した労働者こそ社会の主体であり、その社会的労働こそ社会存立・発展の根拠であること、土地・自然力は、社会の主体である結合した労働者による共同利用の対象と捉えなければならない、ということであった〉」とまとめ、「宇野弘蔵に始まり、大内秀明や鎌倉孝夫によって継承された「労働力の商品化」の概念は、如何なる形で問題とされるのか。少なくとも次の三特質が労働者にとっての弱点として指摘される。①商品の販売の困難。貨幣の直接交換可能性—雇用の不安定、失業の、引いては生存の危機。②賃銀—労働市場で他律的に決定される。③労働が資本家の意志と指揮の下で行われる。労働における労働者の主体性の排除。疎外された労働。……これらの弱点を如何に克服するか、そこに「労働力商品化の止揚」の道が開かれることになる。その点を、次号以下において探りたい」と書いた。そして、最終回の『進歩と改革』2021年9月号でのまとめは、以下のとおりであった。

「異常な酷暑、未曾有の豪雨被害、確実な環境危機の顕現である。貧困と格差の拡大、先進経済圏の人口減少の深刻化、確実な文明危機の顕現である。底知れぬ暗い閉塞感が人々を覆うのも当然の成り行きである。そのとき、「顕在化してきた危機の根本原因は資本主義、問題解決には資本主義からの脱却が必要」と言い、「唯一の解決策は、マルクスの唱える、潤沢な脱成長経済だ」と叫ぶ斎藤幸平の『人新世の「資本論」』（集英社新書）が、新鮮な響きを発して多くの人々に迎えられたのも自然の成り行きであろう。斎藤さんは、驚くほど丹念に『資本論』を読み込ん

でいる。資本主義批判にも稀有の鋭さが認められる。彼が、大学・大学院を米国や独逸で過ごしたことが、正負両面の影響をもたらしている。一方では、活発な国際交流を可能にしたが、他方で、戦後日本のマルクス経済学の研鑽の成果を摂取できずに、古い旧来の『資本論』解釈から脱却できないことになった。……筆者は、「労働力の商品化」を資本主義の核心的矛盾として捉え、その止揚・廃絶をもって社会主義への接近とする見地に立ちたいと思う。したがって、労働大衆の団結に基づく経済的地位と政治的意識の向上が基本的課題となる。……如何に迂遠であれ、地道に努力を重ねる以外に妙案は有り得ない。ただ政治的意識の面では、環境危機と文明危機に特別に強い関心を払う必要が生ずる点が、「入新世時代」の特徴となるであろう」と。

4. 甦る宇野理論

上記の福留久大氏による仙台・羅須地人協会の説明（3の**ゴチック部分**）を読めば、福留氏が実に的確かつ理論的に仙台・羅須地人協会をとらえて、そこに期待していることが解る。とりわけ重要なのは、福留氏が「大内には宇野に対する望蜀の念も残る気配である」としながらも、「望蜀の念を越えて、宇野に対する学問的批判の一端も垣間見ることができる。……「別稿を準備したい」と明記されたところが注目点である」と書くところで、これは私的には「甦る宇野理論」への期待となる。要は、福留氏は「労働大衆の団結に基づく経済的地位と政治的意識の向上が基本的課題」とするわけだが、現在の連合を見れば、労働組合によるそれは、限りなく困難であると思われる。新自由主義化した資本主義は、少数の正規社員による特権的組合と、圧倒的多数の非正規の未組織労働者を分断するからであり、今日的な労働運動の課題は、労働者の脱労働力商品化をいかに図るかにあるからであり、福留氏が「次の三特質」とする「労働者にとっての弱点」があるからである。

第1回目で話したように、私は生協で働きながら消費型の生協よりも生産協同組合に関心を持ってきた。そして22年前に生協を辞めて、脱労働力商品的働き方と生き方を模索してきたわけだが、2004年来「賢治とモリスの館」に通い出し、2005年に出版された大内秀明『恐慌論の形成』（社会評論社）を読んで以降、宇野派を自称するようになった。そして宇野弘蔵をはじめ、大内力、大内秀明、鎌倉孝夫らの先生たちが唱える「労働力商品の止揚」とはいかなるもので、いかにしてそれをすすめるのかを無い頭で考えてきた。そしてこれは、ただ考えればいいという問題ではなくて、新自由主義によって格差の底辺に押しやられる圧倒的多数の労働者や社会的弱者が、公平に職を得て搾取なく働けるようになるためには、さらには資本主義を変えるためには、宇野理論に基づく「労働力商品の止揚」と「アソシエーションの形成」、道はここにしかないと確信するところ。最初に書いたように、①「資本主義のオルタナティブ」を構想し、②「労働力商品の止揚」の在り様を実践的に模索し、③それを現実の「脱労働力商品（アソシエーション）的働き方」や、④「アソシエーションやコミュニティの形成」につなげることが必要だと、前回お話したように、この秋に宇野理論と社会的実践活動を媒介するワーカーズ・コレクティブ「アソシエーションだるま舎」を立ち上げた。そして今春そこからの初出版として、「反貧困・反差別」をテーマにした瀬戸大作『この暗黒社会に光を』と、大内秀明『甦るマルクス』を刊行する。また、この福留さんの「入新世時代の社会主義」も本にしたいと考えている。

5. もうひとつの初夢

年末と正月に、藤井達夫『代表制民主主義はなぜ失敗したのか』（集英社新書 2021.11）と西谷修『私たちはどんな世界を生きているか』（講談社現代新書 2020.10）を読んだ。

藤井達夫は、「古代の民主主義と近代の民主主義の…最も重要な違いは、古代の民主主義がその理念を実現するためにクジを用いたのに対して、近代の民主主義は選挙でそれを実現しようとしてきた点にある」とする。不正何でもありの政権が継続する先の総選挙の結果を見れば、新自由主義は行政の民営化のみならず、腐敗した政権による政治の私有化まで可能にしてしまった。代議制民主主義はまともに機能せず、メディアによる世論操作や同調圧力で選挙に勝った多数派が、市場競争に負けた敗者や社会的弱者や被差別者をあからさまに否定し、さらに人権や国民主権に基づく戦後憲法の改悪を目論んでいる。民主主義の再生と、それによる貧困と差別をなくすために、「くじ引き」と「輪番制」という古の人々の知恵を生かした小さなアソシエーションづくりから始めるところ。組織拡大の方法として、まず全国連合会をつくってから支部づくりをすすめる方法もあるだろうけど、組織が大きくなれば必ず代議制による運営になる。「くじ引き」と「輪番制」による小さなアソシエーションを同様につなぐプラットフォームによるアソシエーションの普及をめざすところである。

西谷修氏は、M. ブランショ『明かしえぬ共同体』の翻訳者だから文学系の方と想っていたら、本の帯には「現代思想の鬼才」とあり、とても視野の広い方で、西洋の近代 200 年と日本の近代 150 年を重ね合わせてグローバルヒストリーを展開し、近代化の果てに新自由主義化した世界と日本の現状をきめ細かく解き明かす。とりわけ日本の場合、危機への対応が、世界の流れとは逆ドライブになっていることを大化の改新まで遡って解説していて、書名どおり「私たちはどんな世界を生きているか」を知るには好著であった。両著ともキーワードは「新自由主義」であり、新自由主義を妄信して政治を私物化する愚かな政治の果てに、日本は社会の底が抜け、展望を描くことさえ困難になった時代の中で、最後に西谷修氏は以下のように書いていた。

「国民が主の政治をせよと要求する人たちは、せいぜい 20% ぐらいかもしれません」。「いままですでに、システムによって周辺に吹き飛ばされた人びとが、民主主義に飽きたり、社会に興味を持たなくなったりしている。彼らはどうすればいいのだろうか。投票しない人が 50% もいる。その人たちは…自分と世界との関係を内部観察して、対象化するようなことをしません」。「それが私たちの役目だと思っています。そういう人たちが日々あくせくして、そんなことなんか考えていられないところで、望まれても望まれなくても私たちはものを考える。ただしそれは近代の「啓蒙」ではない。万古不易の人間の考えるという営みです。そしてそれが多くの人の考えになって、少なくともいま問答無用で進んでいる濁流に堰を立てる。この「無思考化」の流れのなかに生きた思考を些かでも埋め込む。それが務めだと思っています」と。そしてこれを読んだ時に、私はサルトル的な「知識人の役割」という言葉を思い出した。

前述したように大内先生の「晩期 3 部作」の「2 作目」は近々刊行予定。そして残る「3 作目」は、大内兵衛『経済学五十年』（東大出版会）、宇野弘蔵『「資本論」五十年』（法政大学出版会 1970）にならって、『宇野経済学七十年』もしくは、大内先生は今年で 90 歳になられるから、『大内秀明（おおうちしゅうめい）九十年』の書名にして、先生はまだまだお元気だけど、遺書を書くつもりで存分に語っていただいて、本にまとめたいと考えている。これが私のもうひとつの初夢で、これはいい夢だと自賛中。オミクロン株の急激な拡大が気になるけど、三度目のワクチン接種と PCR 検査を受けたら、仙台にうかがいますので、よろしくです。

当初私は、このゼミで「アソシエーションの形成によるオルタナティブな地域社会づくりへ」を予定していたけど、未だそこに行けない。来年は仙台・羅須地人協会創設 20 周年になるだろうから、そこに向けていっしょに考えて行きたい。来年の初夢に向けて、これもよろしくです。